

2025年奨学生総評 林 桂

○入選した応募作の中から、林が推薦した作者、作品の評を以下に。(順不同)

●波野 梅雨 ●(中学生)

冷たくなった魚から

檸檬の香りがする

＊

水彩絵の具のような 雨の日

＊

ジャズの中に隠れた林檎

【評】短律の自由律俳句の中に、鋭い感性が光る作者だ。作者は一行詩の思いで書いているのかもしれない。「ジャズの中に隠れた林檎」は、私には読み解けない。しかし、ジャズと林檎の取り合わせだけでも、十分心惹かれる。

●ムクロジ ●(高校生)

京言葉に慣れて唐辛子のへこみ

全部嫌で寂しくて秋雨きれい

立冬の明日映りにゆく鏡

マヨネーズ逆さに置いて初時雨

前髪にまばたき触れて雪催

小寒のテレビの照らすカップ麺

年越の蛍光灯の紐を引く

海豚とキスする人を見ている真昼

月冴えて二段ベッドに木の梯子

先生が好き 水仙の丘にいて

羊みな耳標を持って冬茜

【評】高校生でこれだけ熟達した俳句を書く人は滅多にいないだろう。優れた表現力を持っていながら、それを先立て読者にアピールしている訳ではない。半分現実、半分空想のような世界で、作者の凜とした感性と青春期の寂しい視線が描かれている。

●齊藤 栞●（高校生）

文庫本を書架へ戻して月鈴子

梨を噛む雨のち晴れの街がすき

灯籠を流して過去がのびてゆく

心臓が鬼燈になるちょっと泣く

【評】寡作の作者だが、一読印象に残る作品が多い。「文庫本を書架へ戻して月鈴子」のような俳句的に巧みな作品もあるが、甘やかな感性をストレートに書き留める。「すき」「泣く」のような言葉を使って佳句をなすのは実は大変難しい。それを難しいことでなくやっている。

●さいう●（大学生）

ぽっぷこーんのあかるさは孤独

ずんむりと
濡れたからだを引き上げて
くるぶしに棲むにんぎょのなごり

せみとりに
向かう
背すじのりんとして
五さいになったおとうとは風

まがたまとして終戦の日をねむる

ぽにゅぽにゅと
うさぎの耳
を揉みながら
もくれんの花 ひらく日 を待つ

さんずいの
ように
途切れたちんもくへ
きみは母音のといきをもらす

さくらばな、ほどの
微熱を
きょうこつに
かかえて蛹化する ひるさがり

一人称変えて葉月の風に立つ

花束を抱くとき樹木めくあばら

しおかぜに吹かれて
春をまっている
つぼみのような ちわわのあたま

【評】作者は口語詩句賞大賞受賞。短歌体の作者だが、5行以内の多行形式をもつ口語詩句の募集の中で、表記、文体を工夫して書いているというのでは一番適合しているだろう。また、俳句文体も展開していて、それは直接的に自己の内面を掘り下げている。

●金光 舞●(大学生)

カーテンは昏さを抱き冬桜

＊

着膨れて

かにくりーむころっけになる

＊

宇宙を知るのは

フウセンカズラが弾ける訳に

少し、通じている

＊

サルビアが心臓なら 鳳仙花は癌

母さん、戻ってこないけど

ずっと言ってるの

【評】言葉に初々しさが感じられる。それを通して、心地のよい自己愛も感じられる。これからどのように展開してゆくのか、楽しみな作者である。

●福山 ろか●(大学生)

ヘッドホン外して冬の星を増やす

葛餅の蜜ことごとく弾かれて

バイパスにつどう風あり花すすき

私だけ躑躅を吸ったことがない

釉薬の白の冷たさ花曇

葉桜のうしろから日の差してくる

青天の奥行きを来るつばくらめ

夕立は音に遅れて島の森

乗り出せば船体見える涼しさよ

【評】現在の俳句表現の骨法をマスターしている上手い書き手といえる。この欄ではおとなしい作品の印象になる。しかし、あるいはそれ故に、作者の感性のよさがにじみ出てくる。技法は必要だが、それを感じさせないことで、読者は作品世界にいち早く招かれる。

●高田皓輔●(大学生)

喉仏の影をくっきり描く薄暮

十代を持て余したら起き抜けの
わたしのからだを舐めるのは猫

涙腺に似た働きの糸蜻蛉

すすきだと思っていたのは
萩でした。
そうですか、
そう言うことばかりです。

同じくらい幸せじゃないで
いてほしい
中央分離帯のさびしいみどり

身をよじるたびに放しそうになる
ちいさいかぶとむしなんだけど

なしくずし的に川面を見わたせば
わたしがわたしになって久しい

方向をふらっと変える人にぶつか
る その夜魚をきれいに食べる

【評】俳句形式にも短歌形式にも拮抗する表現力がある。作者の中では、俳句から短歌へ表現の中心が移っているようだ。口語の短歌形式に抗って書こうとはしていない。むしろ従うことで、思わぬ出口を探し当てようとしているようだ。「猫」「中央分離帯」「かぶとむし」「わたし」「魚」など、作品の後半に登場して、思わぬ世界を見せてくれる。小さな気づきの世界から、不思議な世界に招かれる。

● azusa ● (大学生)

息白くここは夜空が透きとおる街

病棟に消灯のある冬銀河

大通に粉雪宝石店に夜

晴れの日の葡萄に海のような色

水蜜桃ほどの透明感で泳ぐ

病院の中にローソン花の雨

薔薇の雨シナモンロール温めて

桜蕊降る自転車を停めていく

銀杏並木に光さすから学校は
世界のはじまりみたいな夕べ

逢わないことがふつうになって
ポプラ並木に影がある夜

数学が出来ない君と落ち合って
パフェを掬えば
海は快晴

【評】短歌体も俳句体も書くが、やはり俳句が面白い。この作者の作品も、俳句らしい俳

句で、現在の俳句の表現水準をおさえている。やはり読むべきは、その柔らかい感受性だろう。「透きとおる街」「透明感で泳ぐ」などによく分かる。

●奥井 健太●(大学生)

同僚にロボットがいる南風です

ミルクセーキ子供に風のような歌

秋の暮チーズに曇るピザカッター

燃えるものばかりの部屋を冬の蠅

石路の花吸う時灯る煙草です

爆笑に母遠く居て鏡餅

凧を追う首輪に慣れて来た犬が

寒牡丹母から匂う私です

浮寝鳥戦争に布使われて

【評】口語詩句賞奨励賞受賞者。季語を幹旋していわゆる俳句的な処理をしてまとめている。これは俳句を装っているふうに見える。存在や批評を深掘りしながら、それを木の葉

で隠すように俳句的な世界に帰ってきているように思われる。「ロボット」「曇るピザカッター」「燃えるものばかりの部屋」「爆笑に母遠く」「首輪に慣れて来た犬」「布」など日常的な存在の文脈が隠す不穏や危機をあぶり出す存在として認知されている。

●マズルカ●(大学生)

青空にありおりはべりいまそかり
これまで生きているということ

少子化で消えた三年六組の
曇りガラスに映る鶺鴒

悲しいと先に言うのを待っていた
二人ぼっちの風のピンポン

スキャンダル、脱税、
賭博、死体遺棄
種無しぶどうを冷やす休日

【評】清潔な孤独感がある短歌体。ただ「少子化」や社会的な事象についても目は向く。そこから切り離された自分という存在に意識があるのかもしれない。「スキャンダル」はやや異色作品だ。3行目は自身の日常に目を向け、1、2行目と対比させている。しかし、この対比の中で「種無しぶどう」も、汚濁された

社会事象が入り込んだものとして認知されているように見える。自身を清廉潔白とは信じていない複眼が働いているようだ。

●早瀬はづき●（大学生）

火を見ればまばたきのたび
眼のなかに
濡れながら火が像をなすこと

こんなにも秋の回転木馬たち
眼をしめらせて風葬のなか

川べりに腕をひろげて立っている
あなたはだれへ開かれた檻

あらゆる風が
名を持つわけではないことの
うれしさにシロフォンをたたいて

彗星を浴びた向日葵から枯れる

くびすじは世界樹に似て桜まじ

椿落ちるたびに地動説は狂う

【評】短歌体中心の創作だろうが、俳句にも展開している。どちらもいい。短歌も俳句も、自分自身を見つめる器の趣である。「火を見

れば」が最初に作者を注目させた作品である。「眼のなかに／濡れながら火が像をなすこと」が自己凝視に繋がっていると感じさせたからだ。

●大西 美優●(大学院生)

南風吹くナンの脂で濡れた指

夏めいて涙袋にちゃんとラメ

くすくすと早桃の水をもてあそぶ

かじかんで手は初夢になりました

シュトレンに糖衣はうすく冬銀河

【評】俳句体の作者。「脂で濡れた指」「涙袋にちゃんとラメ」「糖衣はうすく」など日常の小さな気づきをベースに、それを抜けた世界にも時々届く。「くすくす」「初夢」がその例だろう。穏やかな作風だが、読後に強い印象を残す。

○入選した応募作の中から林が推薦しなかった作者、作品の評を以下に。(順不同)

●松下 誠一●(大学生)

この夜をひたすら葱に擬態する

ヒヤシンス同士だったと思います

水仙になってもいいですか疲れた

自己暗示とけてポプラも怖くなる

大人しくしてれば鱈になれたのに

前職のクセで背びれが動いちゃう

【評】口語詩句賞奨励賞受賞者。ずっと注目し、推薦してきた作者。表現ジャンルの中心は短歌と聞いているが、口語詩句では、専ら口語俳句と心得ていた。脱力系の世界の面白さが魅力的だった。しかし、私の面白さとはだんだんずれてきて、今回は推さなかった。ただ、作者が書いていたのは、俳句ではなく川柳だと知って納得がいった。(作者はジャンル申請をして寄稿しているらしいが、選者には一切明示されてはいない)川柳と俳句では自ずから読みどころが少し違うだろう。

●雲理そら●(大学生)

瞼のないロボットだけで
生殖をくりかえすなら
みつめあうなら

滅ぶとき、
たぶんあなたは光るだろう
そういう魔法が好きだったから

泣いていたせいで主題のわからな
い映画はすばらしく透明で

嘘をちりばめたものから光るから
あなたたちには夜を教える

【評】俳句体も短歌体も書く作者だが、私は短歌作品を採ることが多かった。しかし、根底に短歌のリズムが感じられたからこう言うのだが、あるいは短詩体なのかもしれないと思う。短歌文体を散文化するような方向性が感じられるからだ。今後、変わってゆき、自分の形式に到達するのだろう。

●汐見りら●(大学院生)

光り方
忘れてしまった魂へ
この金魚鉢を貸してあげたい

手術痕まっすぐ抱え
ぼくたちの犬は
テニスボールをよく守る

骨折の手術の話をしていたら
むねに浮かんでくるはんだこて

泣き顔に見惚れていれば
右利きのあなたに刺しやすい左胸

もみの木よ
ちいさくはやく揺れなさい
澱んだ銀河を磨かなければ

【評】短歌体の作者。数年前に登場したときの鮮烈な印象は忘れがたい。表現の冒険は続いていて注目している。しかし、「作者」として何が書きたいのか、書こうとしているのか、多様な作品群から読者にはその方向性が分かりにくく、「作者像」を結びにくくさせている。作者が「作者」に出会う日を待ちたい。

○入選しなかった応募作の中から林が推薦した作者、作品の評を以下に。(順不同)

●洋梨 またら●(高校生)

あだちたろうより伝言
損失は
気にしないごとに大きくなる

片思いしてるあの子への同人誌
気分だけラクダのまつげ春疾風

グルテンを作る粉からのもちもち

満月の香りだけ掛かるマットレス

私だけが見てたあの人革手袋
吊り革掴む
花粉と髪の毛絡まる春風

【評】俳句、短歌、詩と多ジャンルにわたって書く。一番心惹かれるのは、書くことを楽しんでいることである。その意味では、若書きの作品だろうが、その若書きのよさを感じさせてくれる。「同人誌」の句などは、昭和30年代の寺山修司世代の高校生を思い出させてくれる。みんな初々しい出発点を持っていたことを快く感じさせてくれるのだ。

●川上 真央●(大学生)

T列に開演を待つ
深海は
百合の香りがさざめいている

木蓮の花咲くように
みどりごの右手が
雲のしっぽにふれる

ベーぐると言うとき
やぎとおそろいの
くちびるを陽に差し出している

満員の電車に
揺られるとき
人は
ひとしく牛乳瓶の明るさ

夕虹を描く
クレヨンの筆圧で
きみと渡ってゆく歩道橋

凍蝶のバレッタとめて定積分

息継ぎをする音がして
ソーダ水には
革命の予兆ひらめく

ブロッコリーのつぼみ
をまとう
きみといて
三月だって怖くはないさ

【評】短歌体を中心に書く作者。大学生の区分に入っているが、作品は高校生の時に書かれたものだろう。さいう氏の世界に近いものを感じさせるが、柔らかい感性は今後に期待させる力がある。

●八尾保醒●（大学生）

着ぶくれて心臓すこし遠くにある
友の名に死ぬまである雪羨ましく
体に直線がなくて密やかな湯ざめ
秋薊と言う口が手羽の骨はずす

【評】口語文体の俳句。俳句の手法のひとつの取り合わせをしない。全句つながるいわゆる一物仕立てだが、この文体のよさを発揮している。内容的には屈折がある。仁平勝氏は、取り合わせ句よりも一物仕立て句の方が格が上といていたが、たしかにこの方が俳句表現的には正攻法だろう。